
明日も爽やかに

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日も爽やかに

【Nコード】

N9075S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

健斗と晴美は親友同士。その二人が毎朝会って交えさせるものとは。青春ものです。朝を舞台にしました。

第一章

明日も爽や

かに

夏だ。だが朝は涼しい。

その朝にだ。一台の自転車が走っている。

そしてだ。家々の前に立ち止まってだ。新聞を入れていた。

そこに乗っているのは黒い髪を前だけ伸ばして左右は短くしている背の高い青年だった。黒い眉は長くへの字である。細くそれがやや斜め上になっている。

引き締まった口元にやや垂れた奥二重の目をしている。それが眉といささかアンバランスであるがかえって端整な印象を与えることになっている。服は上が青で下が白になっている。

身体は自転車に合わせたかの如くすらりとしている。その彼が新聞を配っている。

その彼のところにだ。一人の少女が来た。

赤いジャージに黒のロングヘアだ。背は高く走るその度に豊かな胸が揺れている。はつきりとした顔立ちをしており口は小さく鼻も整った形をしている。目は黒く実に大きい。眉は細く流麗な形である。赤いジャージ姿だ。

その少女がだ。彼のところに来て言うのだった。

「今日もおはよう」

「ああ、今日も早いな」

「試合が近いからな」

だからだと。青年に返すのだった。

「だからな」

「それでか」

「そうだ、それで健斗ももうすぐだったな」

「ああ、発表はもうすぐだ」

健斗と呼ばれた彼はだ。強い言葉で少女に返した。

「ピアノのコンクールの発表だ」

「そうか、お互いもう少しなんだな」

「晴美はバスケの試合か」

「ああ。これでもレギュラーだからな」

「だから余計に頑張るんだな」

「もっとも毎日この時間に走ってるがな」

晴美は笑ってこう健斗に答えた。

「それは変わらないがな」

「それでもだな」

「普段より気合が入っているのは確かだ」

そうだというのである。

「それはそちらもだな」

「そうだな。どうしてもな」

「お互い頑張ろう」

「お互いにか」

「そうだ、お互いにだ」

晴美はこう健斗に告げる。今は二人はある家の前にいて止まっている。朝のまだ弱い日差しの中で。穏やかに話すのだった。

「頑張るとしよう」

「そうだな。本当にお互いにな」

「コンクール、優勝するといいな」

晴美はにこりと笑ってこんなことも言った。

「毎日頑張ってるんだな」

「一応はな。ただしな」

「ただし。何だ？」

「俺より才能があって頑張ってる奴もいる」

決して樂觀していない、そうした言葉だった。

それは顔にも出ている。そのうえでまた言うのだった。

「そういう奴がいるからな」

「油断はしないか」

「そうだ、それはしない」

「こう言う健斗だった。」

「絶対にな」

「武藤健斗、相手も見ているか」

「それは芳野晴美も同じじゃないのか？」

「私もか」

「そうだ。相手を侮らないよな」

「相手を侮ったら負けるぞ」

晴美は生真面目な顔になって健斗に言い返す。両手を腰の横にや
つてそのうえでだ。

「それだけでな」

「そういうことだな。だからお互いにな」

「油断せずに頑張るか」

「そうするとしような」

「そうだな。それではな」

「またな」

健斗はハンドルを握りなおして晴美に告げた。

「また明日な」

「うむ、また明日だな」

晴美は微笑んで彼のその言葉に返した。そうしてだった。

第二章

二人はお互いに別れそれぞれ走りはじめた。その時にだった。

健斗は己の左手の柵のところに朝顔を見た。青い朝顔がそこに咲いている。やや紫がかった青だった。

晴美も見た。右手にだ。鉢にある赤い朝顔をだ。こちらやや紫がかった赤だった。どちらも朝顔の色だった。

「夏だからな」

「咲いているな」

二人はその朝顔を見てだ。それぞれ微笑みながら呟いた。そしてその青と赤の朝顔を見ながらだ。そのうえでまた呟くのだった。

「こうして毎日見ているけれどな」

「毎日見えていてもな」

「いいものだな」

「飽きないな」

そしてだ。こうも言うのだった。

「明日もな」

「見るか」

その朝顔を見ての朝のことだった。そうしてだ。

学校に行く。健斗は海のような青い学生服、晴美は上が鮮やかな赤のブレザーと黒いネクタイ、下は緑と黒のタートンチェックのミニスカートに黒いストッキングというスタイルだ。その姿で同じクラスに入る。そしてだった。

「今朝も頑張ってたな」

「そちらこそな」

笑顔で言い合っただった。

「部活の練習以外にもやるなんてな」

「そちらこそあれだな。朝早く起きて新聞配達とはな」

「子供の頃からだからな」

微笑んでだ。こう答える健斗だった。

「家が新聞配達の家だからな」

「それでか」

「ああ。だからな」

「そうか。新聞屋は朝が早い」

「豆腐屋と同じだからな」

「ははは、そうだな」

豆腐と聞いてだ。晴美はその口を大きく開けて笑うのだった。

「豆腐もだな。朝だな」

「だからそれと同じだな。別に新鮮でなくてもいいけれどな」

「そういうものか。しかし新聞ならだ」

「何だ？好きな新聞でもあるのか？」

「大阪スポーツは面白いらしいな」

話に出すのはその新聞だった。

「あれはかなりな」

「面白いがあそこに書いてあるのは嘘ばかりだぞ」

「何っ、そうなのか」

「ああ。全部でまかせを書いているんだ」

このことはよく知っている彼だった。

「スポーツ新聞の中でもあれはな。凄いからな」

「そういう新聞なのか」

「そうだ。だがそれがいい」

何処かの戦国武将みたいな言葉も出す健斗だった。

「あまりにもあからさまな嘘だからな」

「そこまで凄い嘘なのか」

「まず宇宙人が出る」

少なくとも普通の新聞ではないことである。

「その他にも色々あるからな」

「うつむ、宇宙人か」

「何なら家に届けるか？八条新聞の他に」

「そうだな、一度お母さんに話してみる」

晴美は考える顔で述べた。腕を組むとその上制服の中に収められているその二つの胸が乗る。実に見事な胸だ。

「お父さんにもな」

「おい、本気なのか」

「悪いのか？私は何時でも本気だぞ」

「女の子がスポーツ新聞を読むのか」

健斗がここで言うのはこのことだった。

「それは」

「駄目か？それは」

「あまりないだろ」

「そういうものか」

「ああ。まあないな」

また言う健斗だった。怪訝な目と共にだ。

「どうしてもというのなら反対はしないがな」

「一度家族と話してみる」

「できるなら話さない方がいいがな」

健斗は明らかな忠告をした。

第三章

「そういうことはな」

「そういうものか」

「そうだ。じゃあとにかく今は」

「今は？今度は何だ？」

「そっちのことだけれどな」

話を変えたのだった。

「今朝も調子よかったみたいだな」

「うむ、上々だ」

健斗の言葉には笑顔で返す晴美だった。

「この調子でいけばやれる」

「そうか。それは何よりだな」

「そっちはどうなのだ？」

晴美は微笑んで健斗に対して問い返した。

「ピアノの方は」

「悪ければ表情に出るからな」

「ははは、そうだな」

「考えてみればそっちもだな」

「昔からな。そうだからな」

晴美は笑って健斗の今の言葉を認めた。

「嘘がつけないというのか」

「そうだな。とにかくお互いな」

「気合を入れていくでしょう」

こんな話をしてだった。そしてまた朝になってだ。二人は会った。だった。

晴美はだ。すぐに健斗に言った。相変わらずジャージで走りながら。

「今日か」

「そっちも今日だったな」

健斗も自転車の上から彼女に言う。

「今日が試合だったな」

「そうだ。そっちはコンクールだな」

「ああ。やれる」

「期待しているぞ」

「こっちもな。期待しているからな」

そしてだった。二人はだ。同時にこう言ったのだった。

「明日もここだな」

「会つか」

「明るい顔でな」

「会つか」

こう話したのだった。そしてである。健斗はピアノのコンクールに、晴美は陸上の試合に出た。二人はそれぞれの場でベストを尽くした。

だが、だった。まず健斗が落胆を味わうことになった。

確かに全力を尽くした。しかしであった。

優勝できなかったのだ。惜しくも二位だったのだ。優勝はだ。彼をしても啞然とするまでのだ。天才と呼ぶべき少女だった。

その少女がトロフィーを受け取るのをだ。タキシードを着た彼は歯噛みして見ることにしかできなかった。できたのはそれだけだった。その彼にだ。先生が慰めの声をかけてきた。

「よくやったよ」

「そうですかね」

「ああ、君はよくやったよ」

こう声をかけてきたのである。まるでチャイコフスキーの様な外見の禿げて痩せた先生である。その先生が声をかけるのだった。

「だからな」

「だからですか」

「落ち込むことはない」

そうだというのである。

「特にな。こういうことは常だからな」

「けれど」

「まあ二位でも充分だよ」

また言う先生だった。

「それでもね」

「一位になれたんですけれどね」

また言う彼だった。どうしてもという考えが出ていた。

「本当に」

「相手が悪かったよ。そういうこともあるさ」

先生はまた話すのだった。彼は優勝できなかった。これは事実だった。そのことに慰めを受けてだ。どうしようもなくなっていたのだ。

そして晴美もだ。残念な結果だった。

彼女は今二位の場所にいた。そこで言うのだった。

「勝てた」

「いやあ、あんなの相手じゃ」

「ちよつとね」

「無理でしょ」

だが同じ陸上部の仲間達はだ。その彼女にこう言うのだった。

第四章

「あそこまで速いとね」

「まるで馬だったじゃない」

「あんなえげつない相手だと」

「少なくとも勝ちたかった」

友人達の言葉に今度はこう言う彼女だった。

「絶対にだ」

「勝敗は常だからね」

「二位でもかなり凄かったし」

「落ち込まないことよ」

「優勝は逃したけれど」

「優勝か」

晴美はその言葉を聞いてだ。一旦顔をあげた。

そしてそのうえでだ。溜息と共に言うのであった。

「今回はそれを手に入れたかったな」

「まあまあ」

「今日は残念会で忘れよう」

「そうしようね」

「それしかないか」

晴美は苦い顔で頷くしかできなかった。

「今は」

「まあまあ」

「忘れよう」

「もうね」

こうしただ。彼女も自分自身にとって満足いくものではない、晴れない結果に終わった。その晴れない心のままだ。駅で会ったのだ。

「二位か」

「そうだ、二位だ」

晴美が健斗に対して答える。二人は今は制服姿でお互いその駅にいた。

「残念なことにな」

「俺もだ」

そしてだった。健斗も言った。

「俺も二位だった」

「そうか、同じか」

「残念なことにな」

「それでなのだが」

晴美から彼に言ってきた。

「一旦着替えてから何処かで飲むか」

「酒か？」

「忘れるのもいいと言われたからな」

だからだというのである。

「それでどうだ」

「そうだな」

健斗は一呼吸置いてから彼女の言葉に応えた。

「忘れるにはいいな」

「そういうことだ。周りから忘れてしまえばいいと言われたしな」

「それで酒か」

「さっきまでミスタードーナツにいたがな」

つまりそこでドーナツを食べて憂さ晴らしをしていたというのだ。

そしてだ。それは健斗も同じだった。彼も言う。

「俺もさっきまでな」

「憂さ晴らしをしていたんだな」

「喫茶店でケーキを食べてな」

彼はそうしていたというのである。

「それで少しな」

「ははは、本当に同じだな」

「全くだな」

「それじゃあ一旦別れてだ」

「飲むか」

「そうしよう」

こう話してだった。一旦二人は別れてそこから私服になってだ。

また駅のところに来た。その時の二人の服装はというのだ。

健斗はダークブルーのジャケットに白いズボンだった。晴美はスカーレットのシャツに黒のズボンだ。健斗がその晴美の赤と黒の服を見て言う。

第五章

「何かな」

「おかしいか？」

「いや、赤と黒が好きだなと思ってな」

「それか」

「ああ。好きだな」

「そう言う健斗の方もな」

晴美はその彼を見て言葉を返す。

「青と白が好きだな」

「そうか？」

「制服だって青だろ」

「ああ、そうだ」

「それなら好きとしか思えないぞ。今だってそうなんだからな」

「実際に好きだ」

健斗も否定しなかった。

「青はな」

「そうだな」

「それでそっちは赤だな」

晴美に対してもこう返した。

「赤好きだな」

「好きだ。否定しない」

「そうだな。それでだけれどな」

「何はともあれ飲むか」

「残念会だな、お互いな」

こう話してだった。二人で居酒屋に入った。そしてそこで、であった。カウンターで晴美は大ジョッキを片手に持ってた。そのうえで隣にいる健斗に対して言うのだった。

「まあ今はな」

「ああ、どうするんだ」

「飲む」

晴美の返答はこれだった。

「とにかく飲んで食うぞ」

「それで忘れるんだな」

「忘れてまた明日からだ」

「こつも言う彼女だった。」

「明日から頑張る」

「そうか、明日からか」

「そちらはどうするんだ？」

その大ジョッキのビールをごくごくと飲んでから問い返した。

「明日からは」

「そうだな。俺もな」

「うむ、健斗はどうするのだ」

「同じだな」

言いながらだ。彼は目の前にある焼き鳥の串を手にした。そしてそれを自分の口の中にやってだ。鶏肉と葱を食べるのだった。

それからだ。晴美に対して告げた。

「晴美とな」

「うむ、そうか」

「それならだ」

彼もまたビールの大ジョッキを手にした。そのうえでだ。

そのビールを美味そうに飲んでだ。言った。

「明日からだな」

「そうだ、また明日だ」

「明日からまた頑張るぞ」

「いちいち落ち込んでも何もならないからな」

「そうだな。本当にな」

「嫌なことは忘れることだ」

晴美もまた焼き鳥を食べた。

「そして明日からだ」

「また頑張るか」

「そうすることだ」

こんな話をしてだ。二人はこの日は焼き鳥とビールを楽しんだ。そしてその翌朝だ。

健斗は自転車で新聞を配る。相変わらず青い服を着ている。

そこに赤いジャージの晴海が前から走ってきた。そしてだった。

「今日もな」

「うむ、頑張ろう」

二人で微笑んで言い合う。そして別れる。

別れてすぐにだった。二人は朝顔を見た。健斗は青の、晴美は赤の。それぞれの朝顔を見た。そしてそのうえで先に進むのだった。この日の朝も。そしてそれからも。

明日も爽やかに

完

2010・10・25

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9075s/>

明日も爽やかに

2011年5月1日22時10分発行